

辞書を引く

●解剖学者

養老子孟司

(ようろう・たけし)

「最

近の生徒たちは、いくら言っても辞書を引かないんですよ、面倒くさいんでしょうね」という話を聞いた。20年近く前の話である。今ではもつと辞書を引く人の数が減っているに違いない。それでは、人々が辞書を引かなくなつたのはなぜか。

私たちは、食べる、歩く、話すなど日常的な行動をほとんど無意識のうちに行っている。たとえば、「ア」と発するとき複雑な筋肉の運動を意識することはない。意識すればたちまち話せなくなる。しかし、発語がもともと意識的なものであることは、外国語の習得時を考えればよい。一方、意識は相手の話や顔の表情などを読みとり、次にどんな話をするかを決める。仲の良い恋人どうしなら、これらもほとんど無意識に行われているだろう。話

の中身より、話すことそのものが大切だからだ。この場合、意識はほとんど会話全体をぼんやりモニターしているだけと言っているくらいである。

私たちの脳は、眼・耳などからの入力処理したのち、筋肉へ出力する働きをしている。一般的に、動物の脳では、このような知覚系と運動系が即座につながり、ループを作っている。しかし、ヒトの脳では知覚系と運動系との間に過剰なものが挟まってしまった。この過剰な部分が言葉を生み出し、意識を発生させた。乱暴に言えば、ヒトの脳は進化的にそのように生じてきたのである。

ヒトでは、無意識的な行動のように知覚系と運動系がすぐにつながっているものもあれば、しばらくたってから出力されるケースもある。このように、入力に応じて出力を調整できることが、ヒトの脳の優れた点である。一方で、これは、知覚系と運動系をつなぐりをあいまいにする。極端な場合、知覚系からの入力がある中でぐるぐる回るだけで、一向に出力されない。こうしてループが途切れ、脳は身体を忘れる。それどころか脳は、自身が身体の一部であることを忘れる。

入出力系のさまざまなループを用意し、回転できるようにすること、それが学習ではなかるうか。脳からの出力に応じてさまざまな身体の動かし方を身につけること、それが学習であろう。辞

書を引かない人たちは意識的に引かないのではなく、おそらく引けないのであろう。問題は、辞書を引く引かないということではなく、私たちが身体を忘れたことにあるのではないか。私たちは、最も身近な自然である自分の身体に問い続けるしかない。

●養老孟司（解剖学者）

東京大学名誉教授。専門は解剖学。一九三七年、神奈川県鎌倉市生まれ。著書に『からだの見方』（筑摩書房）、『唯脳論』（青土社）、『涼しい脳味噌』（文藝春秋）、『臨床哲学』（哲学書房）、『バカの壁』（新潮新書）など多数あり、解剖学・哲学ほか、卓越したさまざまな知見を発信している。